

合唱ハーモニー論

森田牧朗

1. 良い音程と良いハーモニー
2. 集団の中の音合わせ
3. 平均律の楽器の使用法
4. 一般的な音程の癖と対処法について
5. 発声と音程感覚
6. ハーモニーの良し悪しとは
7. ハーモニー合わせ能力の個人差 (未完)

良い音程と良いハーモニー

人の声は、完全にハーモニーするポイントに近い音程を出すと、自然にそこに引き寄せられる。その引き寄せられる速さは、ポイントに近ければ近いほど速く、十分に近ければ出したほぼ瞬間に声がハーモニーにはまる。

私たちが音程の手本としているのは通常鍵盤楽器である。その調律法である平均律の音程では、完全5度、4度の音程はハーモニーのポイントに瞬間的に声が引き寄せられるレベルにあるが、長短の3度、6度の音程は、そのレベルからかなりずれている。

普通の合唱団のカデンツ練習では、声が自然にハーモニーのポイントに引き寄せられるのを待ちながら、ハーモニー練習をしている。その合唱団が、和音が変わった後時間をかければ完全なハーモニーに達する力があっても、覚えている旋律的音程が平均律的であれば、和音が次々に変わる実際の曲で完全なハーモニーを出すことは難しい。

純正なハーモニーの手本で旋律的な音程練習をすることの意義はそこにある。その場合どの程度正確に音程を覚える必要があるのだろうか？私の経験での結論は、大雑把に平均律と純正律の3度、6度の感じが区別できる、つまり聴き分けられる程度の普通の音感の持ち主ならば大丈夫であって、普通のアマチュア合唱団で困難なく練習可能である。

自分の声がうまくハーモニーのポイントにはまると、ハーモニー固有の響きが出る。この経験は非常に重要で、この響きが出る方に声が自然に引き寄せられて行く感じで音を合わすのが実際的感覺であり、そのため上に述べた程度の大雑把さの音程で、十分音を合わせられるのである。

集団の中の音合わせ

実際に合唱で音を合わせる状況を見てみよう。それは1つの音に自分ひとりが音を合わせるわけではない。複数のパートがあり、そのパートそれぞれも1つの音にまとまっているとは限らないのである。

そういうところで音を合わせるとはどういうことなのか考えて見よう。各パートがまとまっていず、パート間の音程もぴったり合っていないくとも、不完全なハーモニーは出ている。実際の合唱の中で音を合わせるとは、その人に聞こえている和音の中でなるべく合う音を出すということである。

例えばドミソの和音が聞こえている時、その人のパートがソであれば、なるべくよく響くソを出すということであるが、その音を合わせる感覚が今鳴っている和音の完全さよりかなり優れていれば、その人が声を出すことで和音は改善される。一方感覚が鳴っている和音よりかなり劣っていれば、和音を劣化させる。(本稿では音階音として音程を論じるので、すべて移動ド法で表すことにする。)

良きにつけ悪しきにつけ、かなりという言葉を使ったのは、その合唱団のハーモニーの水準から、ある程度離れている人は、影響力があるが、水準に近い人はハーモニーから影響されても、ハーモニーに逆に影響することはあまりないからである。

合唱団に音を合わせる能力の非常に高いメンバーが加わると、一人でもハーモニーが良くなることがある。他の音に引きずられないで良いハーモニーのポイントにしっかり声を保っていれば、他の人の声もそこに引き寄せられるからである。その場合、不思議に感じるかもしれないが、優れたメンバーのパートが良いポイントに揃うだけでなく、他のパートにも良い影響を与える。典型的な例を挙げよう。たとえばドミソの和音でソプラノがミを出している時、音が混じって濁っていても中心となる1つの高さは一応聞こえている。それに対してバスの中の一人が、ぴったり合うドをしっかり出して保っていると、まずバスとソプラノでハーモニーしているドとミにそのパートの音が揃い、それにアルト、テノールのドやソも引き寄せられて合ってくる。

良く合ったハーモニーを経験すると、その感覚は無意識の中にかなり良く記憶される。これは、良いハーモニーの経験が良いハーモニーを出す能力を育てるということである。だから良いメンバーが加わったことでハーモニーのレベルが上がった合唱団は、そのメンバーが休んだ時も、ハーモニーは結構維持されるものである。

このことは、合唱団のハーモニーの伝統ということを説明する。新しく加わった未教育のメンバーは、あるレベルのハーモニーの中で歌うことで、そのレ

ベルのハーモニーを出せる能力が養われ、伝統がつながって行くのである。

しかし、この自然的なハーモニーの継承は、基本的に同じ水準で続き、次第に良くなって行くということはあまり期待できない。

一方、合わせる能力の高い個人の影響力は、能力が高ければ高いほど大きいから、合唱団のハーモニーのレベルが今までより上がる事が起こりうる。その意味で、個人的にハーモニーを合わせる能力を高めることは極めて有用である。一人だけハーモニーを合わせる能力を高めても、仕方がないということは、決してないのである。

合唱団のハーモニーは、メンバーの合作であるが、その力学を一言で言えば、ハーモニーを合わせる能力の高いメンバーと低いメンバーの綱引きである。ハーモニーを崩す人の影響力は、たとえば声量があつたり、声質が硬かつたり、ビブラートの癖が強かつたりするとより大きくなるが、こういう発声的要素はとりあえずおいておいて、音程的な観点から考えて見る。

1つの典型的なタイプは、自分の中で聞こえている音と、出している音がずれる(おおむね下がる)ものであるが、とりわけ発声的にきつところで、思っている音より低い音を出してしまうケースは多い。その中でも下がった音が周囲の音に自然に引き寄せられて修正されず、そのまま出し続けるのが、一番困る。

ずれる理由は何であれ、同じパートの周囲の音とずれた音を出すと、当然音がばらつき、そうすると正しい音高が分かりにくくなる。私たちは、絶対音で歌っている人でなければ、その時の基準の音階ピッチで音を認識している。実はこの基準の音階ピッチは、和声の支えのない単音が乱れたときが一番分からなくなりやすい。合唱の中でどんどん音が下がって行くような人は、その人の感覚内の基準ピッチが、悪循環的に下がって行っているのだと思われる。音が下がる傾向のある人は、パート内の音に合わせてようとするより、ハーモニーに声を合わせるよう、指導した方が直りやすい。

自分の思っている音と出す音がずれる癖には、歌って録音して聴いてを繰り返すのが最も効果的な矯正法である。鏡に映しながら字を書く練習と似た原理である。これは、音程の狂いが大きいと指摘された人に特に勧めたい。

もう1つの典型的なハーモニーを崩すタイプは、音が動く時、大きく外す癖である。一般にアタックが強い人に、低めに音をしゃくって出す癖が多い。こういう人は、自分のその癖がハーモニーのポイントを掴みにくくしていることの自覚がないので、適切に指導者は助言すべきである。このタイプは音感上の欠陥ではなく、歌い方や声の出し方の癖の場合がほとんどのようである。私たちは歌う時、ある音程に声を保って出そうとする。しかし話をする時は、出し始めの音程は動いて一定に保たれていない。このタイプは話す時のような声の

出し方の場合が多いので、自覚させると良い。

平均律の楽器の使用法

合唱練習の際、ピアノやキーボードなど平均律の楽器をどのような注意を払って用いるべきであろうか？人は微妙な違いを聴こうと神経を集中しないかぎり、多少違った音程でも、無意識に保持している自分固有の音程で受け取ってしまう。この感覚の特徴を理解して対応することが必要である。

曲の最初の段階のパート練習などで平均律の楽器を用いて単旋律の練習をしても、音程を精密に聴こうと意識していないから、ハーモニーの感覚が狂うおそれはあまりない。

通常のピアノ伴奏では、合唱団がアカペラで純正なハーモニーを出せる能力を持っている場合、伴奏との力関係で、たとえば伴奏が分散和音的で合唱のハーモニーが優勢のときは、純正に近くなり、伴奏が厚い和音を重ねて優勢のときは合唱の音程も平均律に引きずられる。

ここで、問題はアカペラで純正なハーモニーを出す能力のない合唱団を厚い平均律楽器の和音の中で歌わすことである。ハーモニーの水準がある程度純正に近づいている発展途上の合唱団にとっては、これは有害である。

カデンツ練習などハーモニーを合わせることに集中する練習では、特に害が大きいと考えてよい（普通の曲を歌っているときに伴奏音が鳴っている方は比較的害が少ない）。伴奏者は、和音を弾くときその中の3度音を単音として目立たないように和音に溶け込ませるよう心がけるべきである。ピアノの場合ペダルで保持された和音の方が良い。特に悪いのは、三和音の3度音を音程的に意識させることであるから、下がっている時も平均律の楽器音で直そうとすることは、禁物である。

平均律より常にレベルが低いハーモニーしか出せない場合は論外であるが、そうでない合唱団で、音が下がるのをピアノでどう修正すれば良いかは、悩ましい問題である。状況によって、たとえば三和音の3度音をわざと抜いた空虚の和音を使ったりすることが考えられるが、適切な対処には、指導者、伴奏者が純正なハーモニーを知っていて正しく聴き分けられることが求められる。

一般的な音程の癖と対処法について

大抵の人に聞くと五度は合わせやすいが、三度は難しいと感じている。これは、普通の人を持っている一般的な音程の癖の為だと思われる。一般的な癖と

して、完全なハーモニーをもたらす音程に対して、高めにずれて取りたがる音と低めにずれて取りたがる音がある。高めに取りたがる音は、長音階でミ、ラ、シであって、これらの音を自然な感じで出すとハーモニーのポイントから外れるため、合わせにくく感じるのだろう。その他の音、ド、レ、ファ、ソはミ、ラ、シに対しては低く取ることになる。このずれは、平均律の純正な音程からのずれと同じ方向なので、平均律の音に馴染んでいた結果だとの説明が多いが、私の観察では、多くの人は平均律より大きくずれている。このずれは、日本民謡の陽旋法やグレゴリア聖歌などでかなり大きいので、明るい音は高めに、暗い音は低めに取りたいという、旋律的欲求によるようである。

合唱の指導では、音が下がるのを発声法の改善で直そうとするやり方が良く見られる。しかしそれだけではなかなかうまく行かないことは、経験することである。注意して観察すると、下がるのは決して上に述べた高めにずれる傾向の音のところではない。そういうところではおそらく無意識の音感が支えて下がり難いのだろう。下がるのは必ず純正な音程に比べて低めに取る傾向の音、ド、レ、ファ、ソに向かうところである。シドとかミファという音形で下がらないように発声で気をつけさせると、シとミが上がるだけでドとファは上がらず、かえってハーモニーが悪くなることが多い。この場合はド、ファをしっかりと高く歌わせるべきである。

指導者は、このように純正な音程に対して低めになりがちな一般的な音程の癖を知っていて、適切に指示できることが望ましい。そのような、一般的な癖について詳しく見てみよう。

音階の中で最も低く取りがちなのは、ファである。ミファと半音上行がその中でも特に低くなるが、飛躍してファに入るときもソやドへの時より低い場合が多い。シドの半音もこれに次いで狭くなる。

次は、ドミ、ミソ、ファラ、ラド、ソシ、シレの3度音程であるが、短3度は狭く、長3度は広がるのが一般的傾向である。特に下行の長3度、ミド、ラファ、シソというような音型を歌うとき下がる傾向が強く、特に発声でしっかり頭部に共鳴していないときこうなり易い。

もう1つは、集団の中の音あわせの項の最後に触れた音を外すタイプで、これは大きく跳躍した音程で起こりやすい。4度とか5度の下行で下に行過ぎるのが典型的である。この場合は前述のように声の出し方の癖の影響が大きいですが、一部音程の癖もある。長音階で主音のドに対して、一般的にソをやや低くファをかなり低く取る傾向がある。短音階でもミをやや低くレをかなり低く取りがちである。平均律ではドに対してソが純正よりわずかに低いですが、そのレベルの程度ではない。私の観察では、この癖は日本音階の音律の影響のようである。もう1つ、日本音律的な癖として重要なのは、音階の2度音、長音階のレと短

音階のシ、が低めになる癖であるので、注意する必要がある。

因みに、グレゴリア聖歌はピタゴラス音律で歌うべきだとだとされていて、ミラシを高く取るだけでなく、レファソも高く取らないといけないが、後の方はどうも日本人は不得手のように思われる。

発声と音程感覚

合唱団のハーモニーを、全体として訓練する際にも、一人一人の能力として見る場合にも、発声と音程の関係はしっかり考察しておく必要がある。多くの合唱指導者はハーモニーが悪かったり音が下がったりすると、発声を改善して対応しようとする。音程が悪いのを発声を直すことで良くしようとする。

しかし発声を良くすれば音程が良くなるものだろうか？発声の良い人は一般に音程も良いが、これは音楽的訓練が平行に進んでいるだけではないだろうか？私は発声と音程は本来別個のものだと考えている。確かに、高い音が下がるのは発声を改善すれば直せるが、これは持っている音程感覚のところに音を保つことが発声を良くすることで可能になったということで、音程感覚が向上したわけではない。ただ、発声を直す過程で良い音程の手本で副産物的に音程感覚も同時に訓練されることは多い。そのため音程を独立に訓練すべきものという認識がなかなかされないのではないかと思う。

音程の訓練には、実は二種類ある。それは旋律的音程感覚と和声的音程感覚が分かち難いが別にあるからである。ハーモニーの中ではある音程関係の音は固有の響きがあり、またその音程に近い音を出すとぴったりのポイントに引き寄せられる。この引き寄せられる感じとその響きでその音程を認識している。

この和声的音程感覚の訓練は通常カデンツ練習などで行われる。指導者はハーモニーに入り込むように、溶け込むように声を出すよう指導し、その音を高くとか低くとか指示することは少ない。この段階では音程の高低を意識するよりハーモニーの響きを覚えようとする方が良い結果をもたらすのでそれで差し支えない。

しかし、このような形で訓練された和声的音程感覚はなかなか旋律的音程感覚となつて行かない。具体的に例を挙げよう。たとえば、ドミソの和音の中でドの音を出す感覚を覚え、ソシレの和音の中でレの音を出す感覚を覚えても、両和音がつながった時のドレの旋律的音程はなかなか掴めないのである。さらに、もっと基本的な和音の中の音の間の音程も、ハーモニーの響きで合わせることができると、旋律的音程として取り出しては正確に認識できていない人が大部分である。たとえば、ドミソの和音の中でミを合わせられても旋律的にドミの音程が不正確という風である。(純正な長3度、長6度の場合特に正しい

認識を妨げる錯覚というものがあるように思われる。純正な長3度、長6度の上行は平均率に比べ音の高さとして低いのに、それが出てくるハーモニーはむしろ明るい響きに聞こえる。そのため和声的音程感覚と旋律的音程感覚とが矛盾しているように感じられ、なかなか正しい感覚が結びつかないようである。）

ハーモニーを合わせる時は声をうまく溶け込ませることを心がけ、音程を加減することにこだわらないほうが良いが、ぴったり合った感覚を掴んだらその時の音程はしっかり記憶しようと心がけることが大変重要である。良いハーモニーを実際の曲の演奏で出すには、旋律的に純正な音程で歌えることが絶対必要だからである。なお、純正な音程を旋律的に出せる音源や録音を用いて、良い旋律的音程を覚えることは多くの人にとってかなり有効な練習法である。ただし、この方法はその後すぐに自分の声で実際にハーモニーを合わせて出してみることが肝要で、ただ耳で聴いて覚えようとしても身に付かないようである。

発声と音程に関するもう一つのトピックは、声の響く位置、頭声、胸声などと音程との件である。響きの位置が下がると音程も下がると指摘され、指導者はしばしばそのように注意する。それはそれとして正しいのだが、これは感覚的には音程と音色の混同の一種である。一般に明るい音色の音は高く暗い音色の音は低く感じる。耳が訓練されていない人は、なかなか音色と音程がしっかり区別できない。そして結果として暗い音色の音は低めに、明るい音色の音は高めに取り勝ちであるので、そういう人に音色を保ったまま音程を直させるのは大変むづかしい。響きの位置が下がって音程も下がるケースが実際にはほとんどなので、上のような指導はおおむね的を射ている。しかし、バスやアルトの低音域で音程が下がるケースでは、やはり音色と音高をしっかり区別させる訓練が必要であろう。

ハーモニーの良し悪しとは

合唱のハーモニーの良し悪しとは何かを考察して見よう。音はあるレベルより良く合うとその和音固有の響きが聞こえるようになる。これには音程が合うポイントに近いことが第一に求められる。それとともに合わせる音同士が適切な強さと、ある種の適切な相互関係を保っていることも重要であり、たとえば離れた位置で声を出して合わせるのは難しく、また声質が非常に違う人と合わせるのも難しいというようなことがある。しかしこれら音程以外の要素は、分析が難しく正直良くわからないので、とりあえず音程に限定して考えることとする。

和音の構成音の中で5度関係にある音がある程度良い音程を保てば、一応響きが出る。逆に5度関係にある音が狂うと非常に音が汚く、ハーモニーが悪い

ことが一目瞭然になる。“一般的な音程の癖と対処法について”の項でも触れたが、多くの人にとって5度は比較的合わせ易いようであり、事実ほどほどのレベルの合唱団でも和音の中で5度関係は大体合っていることが多い。しかし、和音の中の3度関係がきれいに合っている合唱団は極めて稀である。3度関係の音とは、たとえばドミソのミの音程である。かなり良い方の合唱団でも、長く伸ばした和音は美しく響いても、和音が次々変わる和声の流れが本当にすっきり格調高くは聞こえない。

良いハーモニーの判定の目安を私は次のように考えている。第一に、和音の3度音がきっちり響いていること。第二は、和音の変わり目の瞬間から合っていることである。

第一の点を説明すると、メンバーが本当に良いハーモニーの経験を持っていないと、聴き合って音を合わせても、3度音は不安定になり勝ちで、良い響きが強く聞き手に印象付けられない。まあまあいい音がしている程度のレベルの合唱団は、おおむね3度音までは決まっていない。

第二の点を説明する。和音の変わり目でどの位速く完全な響きになるかで、我々には響きの質がまったく変わって聞こえる。聴覚は音の立ち上がりの瞬間を敏感に聞き取るものである。子音や種々の音色の聴き分けなどからそのことは分かるし、録音からアタック部分を削除して聞かせると、多くの楽器音がそれと聞き取れなくなることが、知られている。各和音が鳴り初めから完全な響きを保ってつながったハーモニーは、一種独特の格調の高い響きがする。特徴として、各和音の性格、色彩感がクリアに感じ取れ、明確な輪郭線が描かれているように聞こえる。

この二つの目安で、ハーモニーの良し悪しはほぼ分かる。そこで重要なのは、メンバーの能力である。その能力とは、良いハーモニーの響きの経験を良い音程に結び付けているということである。まず3度音がきっちりポイントにはまった和音を経験して確実に出せることが求められるが、その上それが旋律的音程としても記憶されていることが必要である。このようなメンバーが多数を占めていればその合唱団は、良いハーモニーを出せる。

“集団の中の音合わせ”の項でも述べたが、合唱団のハーモニーはメンバー間の能力の綱引きで決まる。その結果しばしば面白い現象が起こる。というのは、完全に良いハーモニーに至る過渡的な段階では、各パートが揃っているのにハーモニーのレベルが低い場合もあれば、ハーモニーは響いているのに、各パートの中にずれた声が混じっている場合も生じる。前者の方が一般的で、一応きれいなハーモニーに聞こえるがいまいちクリアでない。後者は、純正なハーモニーの訓練を施された合唱団で見られる。メンバーの一部が訓練されて純正な音程が出せるようになったが、そこに至っていないメンバーもかなりいる

ような状況でこういうハーモニーが観察される。

このケースでは、純正なハーモニーから純正な旋律的音程を記憶する段階に進んだメンバーは、実は他のメンバーの音程も分かるようになって来る。お互い教えあって向上する上で良いようにも見えるが、一方合唱団内の人間関係では注意が必要でもある。

因みに、ハーモニーを作る音に少しずれた音が共存する形というものは、実は器楽を含め実際の演奏では普通に見られるものである。勿論、不完全な訓練状態のメンバーによってもたらされたものとは違うが、音の現象として見れば同じ本質である。たとえば、ポピュラーのアカペラグループでボーカルが癖のある音程で歌うとか、純正なハーモニーの合唱がピアノ伴奏で歌うとか。

ハーモニー合わせ能力の個人差

ハーモニー合わせをいろいろな人で試みた経験から、気付いたことを記そう。ハーモニー合わせ能力の根底に音感があることは確かだが、それ以外にもいろいろな要素がある。出した音が不完全なハーモニーだった時、どの程度完全な音に持って行けるかは、無意識的な声のコントロールの話であり、かなり個人差がある。私が何人かの人と二人で音合わせをした経験では、明らかに音感がかなり悪いために音が合わせられないと判断される人もいるが、普通の音程などそれほど悪くないのに音が合い難い人がいる。

合いにくい人の一つのタイプとして合わない音程を覚えているというのがある。私がこのタイプの人と音合わせをする時は、相手に音合わせを意識させないようにすることにしてている。このタイプでは本人に意識させると、音はその人の音程のポイントから合うポイントに近づくとその人のポイントへずるずる逃げて行ってしまっていて、いつまでたっても合わないのである。長短の三度や六度でこの癖の人は多いが、完全五度などでも軽微な程度ではかなり一般的である。完全五度は狭めの癖が普通だが、合わせようと意識すると逆に広くずれる人もいる。三度、六度では長はかなり広め短はかなり狭めの人が多く、意識させると合うポイント付近で音程が非常に不安定になる人が多い。このような人を訓練するのにどうすれば良いか、完全な結論ではないが、方法は二つありそうである。一つは音合わせを意識させずに純正な旋律的音程を覚えさせること、もう一つは意識させずに良いハーモニーの響きの経験を十分にさせることである。

このタイプの中に音楽的訓練をかなり積んだ人もいる。それは平均律的音程を強く記憶しているタイプである。しばしばこのタイプの人には自分の音程に自信をもっているし、極端な場合は純正なハーモニーに違和感を持ったりする。

発声と音程感覚の項でも触れたが、音の出し方で合わせにくいタイプもある。その一つは意識している音より低い音からしゃくって入って来るもので、低い声域でこういう癖の人が多。特にバスで低い声域をしっかりと響かせようと力が入るとこうなる人が多い。バスの人には低めに若干ずれた方が重みが出るような音感的錯覚に陥る人がかなり居り、特にバスの音質の人がそうなり易い。第二は、歌うようにではなく話すように音を出す癖の人である。歌は階段状に音程を取るが、話す時には音程は連続的に変化する。歌に言葉としての表現力を持たせる為に、この二つの音程の取り方をうまく妥協させて使うことは必要だが、これは高次の問題である。とりあえず音を合わせる場所では、話すように音程を取る癖の人は自覚して直すように心がけるべきである。この癖、関西人に多いのは、日常の言葉がもともと旋律的なためだろうか？

もう一つは、声質的に合いにくい人である。がさがさして共鳴のない声は、音がハーモニーしているかどうか分かりにくいので、一緒に歌って合わせるのも難しいが、本人も自分の声が合っているかどうか分かりにくく合わせ難いというハンデがある。その点滑らかで共鳴のある声の方が有利である。同様なことは硬すぎる声や、響きの質がきつ過ぎる声にも言える。声の質ではないが、ビブラートがかかりすぎる声、不安定な震え声などは合わせにくい。この様な合わせにくい声でも、私の感じでは音感の良い人ほどうまくカバーしているようであるから、発声の改善とともに音程を聴く耳の訓練も有効である。

後、明らかに音感が悪い為